

平成10年度

外国語を通しての異文化理解

— ネイティブ・スピーカーとの体験的外国語学習を通しての国際理解教育 —

川崎市総合教育センター 小学校における外国語教育研究会議

外国語を通しての異文化理解

— ネイティブ・スピーカーとの体験的外国語学習を通じての国際理解教育 —

小学校における外国語教育研究会議

国嶋 信¹ 吉澤 寿一² 佐々木千鶴³ 川本 雅世⁴ 小池 優一⁵

要 約

国際化が益々進み、経済・文化などあらゆる面で国際交流が盛んに行われるようになってきている。現在、世界的に見ると、電話、ファックス、雑誌、インターネットなど、いわゆるテレコミュニケーションの約9割は英語で行われている。しかも21世紀にむけて益々その数値は増大することが伺われる。まさに英語は、テレコミュニケーションの世界では唯一の言語になりつつある。こうした人と人をつなぐコミュニケーションの必要性が増すにつれて、英語教育の低年齢化はますます進んでいくのではないかと予測される。同時にこれまでの学校教育における国際教育や外国語教育のあり方についても改善が求められている。これからの国際化社会を迎えるにあたり、小学校段階で、生の英語に慣れ親しむことにより、コミュニケーション能力の基礎を培うとともに、国際理解にも役立てることは、大きな意義がある。

2002年より新たに組み入れられる総合学習の時間では国際理解教育の一環として子ども達に英語に触れる機会や、外国の生活・文化などに慣れ親しむ機会を持たせることができるようにすることが求められている。こうしたことを基礎に本研究では、他文化や他言語を受け入れることに対してより柔軟な小学校段階でチーム・ティーチングの授業形態でネイティブスピーカー(ALT)との交流を通しての活動を考えいくつか検証してきた。今後の小学校での国際理解教育・外国語教育のあり方を考える上での方向性や資料を提示できたのではないかと考える。

キーワード：小学校、外国語、総合学習、国際理解、異文化理解、ALT

目 次

I 主題設定の理由	215	II 研究の内容	218
1. 今日の状況から	216	1. ゲーム的な活動	218
2. 中学校教育の外国語学習の実態から	216	2. ALTとの個人的・直接的・ 体験的コミュニケーション	218
3. 研究の基本的考え方	216	3. チャンツ	218
4. 研究のねらい	216	4. 段階的あいさつ	218
5. 研究の重点	217	5. 年間を通しての活動例	219
(1) 国際理解を促す外国語教育	217	III 研究の成果と今後の課題	220
(2) だれでも、どこでも	217	1. 研究の成果	220
(3) ALTとのチーム・ティーチングを 基本とする	217	(1) 生徒のアンケートから	220
(4) 「聞く」「話す」が中心の コミュニケーション活動	217	(2) 模倣する天才	221
(5) 学習の動機づけと子どもの 注意集中域を考慮した活動	217	2. 今後の課題	222
6. 研究の方法	218	おわりに	222
		参考文献・指導助言者	222

¹ 川崎市立富士見台小学校教諭(研修員)

² 川崎市立小倉小学校教諭(研修員)

³ 川崎市立玉禅寺中学校教諭(研修員)

⁴ 川崎市立玉川中学校教諭(研修員)

⁵ 川崎市総合教育センター研修指導主事

I 主題設定の理由

1. 今日の状況から

21世紀に向けて益々国際化が進展し、地球的な規模で相互依存の関係が加速している。人種、民族、宗教、言語の壁を越えて、世界中の人々が理解し合い、協力し合うことがいっそう重要になる。この様な時代の要請に答えるためにも、異文化理解教育、外国語教育の改善と充実は不可欠である。

世界の早期外国語教育の調査では、10歳以前に導入している国は119カ国のうち74カ国(62%)である。¹⁾また、世界の人口の半分以上が2言語使用者(bilingual)である²⁾という現実を見つめるならば、学校教育の初期の段階から他言語・文化に触れさせても何ら不自然ではない。初等教育期間中、他言語・他文化に触れ比較する中で、さらに強く自国の言語・文化を知ることになる。

日本人は国際的に見て、異文化理解に対する寛容性とコミュニケーション能力に欠けているといわれている。21世紀を生きる子供達が、相互依存と交流の時代に日本人として、また、地球市民としての責任を果たせるよう、より早い年齢段階からの異文化理解、外国語教育を推進していくことが、今後さらに重要になると思われる。

2. 言語習得上のメリットから

1993年より実施されている学習指導要領の中学校外国語(英語)教育では、コミュニケーション能力の育成が目標に上げられ、様々な活動を通しての実践がなされてきた。

ALTとのティームティーチングでの授業は、生徒の言語に対する興味と運用能力を高めてきている。

より効果的な言語習得の観点から、小学校段階からスタートする外国語教育は、様々な点で有効であるという考え方がある。すなわち、子どもは、外国語に対する新鮮な興味と率直な表現力を有し、音声面における柔軟な吸収力を持ち、外国語の習得に極めて適している。その為、発達段階を考慮して、小学校段階から外国語教育を導入していけば、その能力を中学校、高等学校へと発展させていくことにより、日本人の外国語の能力は著しく向上するとの考え方である。ただし、子どもの学習負担という見地からも慎重な検討が必要である事は明らかである。

3. 研究の基本的考え方

小学校の英語教育は、中学校における英語教育の前倒しの導入ではないという考えは全ての人の一致するところであろう。それでは両者はどの様に違うのであろうか。文字導入をしないことだけなのであろうか。こうした問いにはっきりとした方向性や考えを持たずに進めていけば、中学校での英語学習をただ薄めただけのような英語教育がなされるかもしれない。中学・高校の6年間も英語を学習して英語がいっそうに使えないという不満の声があるが、同様に「小学校から英語を学習しているのに……。」という声にならないようにするために、また、ゆとりの教育が叫ばれる中、新しいものを導入して子供達をいっそう疲れさせないようにするために、小学校での外国語教育のあり方について慎重に考え、「ことばと学び」についての理解を深める必要がある。同時に子どもの側から学習することが増えて、困るというようなマイナスイメージを植えつける事なく、新しいことを学ぶ事が、こんなに楽しいことなのかを体感できるようなスタートにしていくことが望まれる。

子どもが言語的やりとりを通して言葉を学ぶということは、語彙単位や文法の取得にとどまらず、一つの人格を持った人間として他者とどうかかわるかを学ぶ事を意味している。さらに、その言葉を話す人々のものの考え方や感じ方を理解する事であり、文化を学ぶ事にも通じる。よって児童が将来遭遇するどの様な文化の多様性にも対処できるbilingual(2言語使用)でmulticultural(多元文化的)な視点、態度を育てる事などが必要になってくる。

4. 研究のねらい

2002年以降、小学校において「総合的な学習の時間」が設定され、その中で外国語の取り扱いに関しては「国際理解に関する学習の一環としての外国語会話等を行うときは、各学校の実態等に応じ、児童が外国語、外国の生活や文化等に触れ、親しんだりするなど小学校段階にふさわしい体験的学習が行われるようにすること。」³⁾とある。国際理解教育の一環として捉え、外国の生活や文化に親しむ過程で外国語に慣れさせるということである。このことは、小学校における外国語活動は、
①各学校の実態を重視する。
②総合的な学習の時間や特別活動を活用して行う。
③国際理解教育の一環として扱う。

¹⁾『英語教育学研究ハンドブック』垣田直巳 大修館 1979年 ³⁾「中央教育審議会の中間まとめ」1998年

²⁾『早期英語教育』垣田直巳 大修館 1993年 p.93

- ④外国語に触れる事をねらいとする。
- ⑤外国の生活や文化などに慣れ親しむことをねらいとする。
- ⑥小学校の段階にふさわしい、体験的な学習を中心にする。などの特徴をもつように配慮することを求めている。
- 中学校では、「実践的なコミュニケーション能力を育てる」事を目標としているのに対し、小学校段階では「外国語に親しむ」ことを目指している。そのような流れの中で本研究会議では、ALTと接し、彼らとの体験的活動を通して外国語に触れることで、子どもの外国語や異文化に対する興味・関心を高めることを目標に、主題「外国語を通しての異文化理解」を設定した。

5. 研究の重点

(1) 国際理解を促す外国語教育

「国際理解教育」での中心になり、貫かなくてはならない考え方は、「人権の尊重」と「世界の平和」であろう。「国」と「国」にこだわるのではなく、異なった文化を持つ人々の固有のアイデンティティーを尊重し、対立や摩擦ができるだけ少ない状態で、互いにそれを認め合える世界を目指すべきである。

子供の時期は自分中心に考え、行動し、自分の身近にあるものや自分と近いものは理解しやすく、受け入れやすい。しかし、自分とは異なるものについては理解しにくく、時に違和感さえ感じることもある。例えば、子ども達の「いじめ」は、自己中心的で異質なものを排除する傾向の現れと考えたとすると、「国際理解教育」の推進によって、広い視野と柔軟な思考を促すことが、問題解決の一助となりえるのではないだろうか。

(2) 誰でも、どこでも

現在都道府県に文部省による小学校外国語研究指定校（1997～99年 34校、98～2000年 12校）があり、多様なカリキュラムが生まれ、その内容も歌、ゲーム、ごっこ遊び、スキットなど体験的活動を多く取り入れ、聞く、話すを中心にネイティブスピーカー（ALT）とのチームティーチングの形で授業が展開されているのが主である。

また、言語学習を中心に据えた学習形態、異文化理解に重点をおいたもの、前述の中間を相互に行き来する授業形態など様々である。

それらの指定校では、ガイドラインの無いところから活動内容をつくりだしており、それが他のどの小学校、児童にも有効な活動かは検証できていない。また、年間

に渡り、また複数年に渡りカリキュラム化していく中で思考錯誤している現状である。

英語の専科の先生が小学校ではない現状と、本市でのALTの人数と小学校数を考えた場合、研究開発指定校での授業形態や年間授業計画などをそのまま取り入れることは人的条件の面で不可能である。

どの小学校の現場においても子どもにも異文化体験をさせることができ、外国語を使ってコミュニケーションをする喜びを体験させ、尚かつどの学校の先生でも外国語を通じての国際理解教育を推進していこうと試みる目当てが立つように、基本的ガイドラインをつくっていく必要性がある。

(3) ALTとのチーム・ティーチングを基本とする

intercultural awareness(異文化を知る)からintercultural understanding(異文化理解)を目指すには、必ずしもネイティブ・スピーカーとの学習でなくとも効果はあるだろうが、ネイティブ・スピーカーとの直接的な関わりにより、それ自体が異文化に触れ理解し、言語学習にもつながり、学習を越えた直接的な体験を通しての効果が期待できる。子供側からの見方としてALTとの交流をする満足感を与えることができ、言語を通じた文化交流をする事ができる。また、年齢の低い時期からネイティブの言語に十分に接し慣れ親しめば、その言語音を自然に身につけることができる。年齢の低い時期ほど英語のリズム、イントネーション等を含む「音」を識別できたり模倣する能力に優れたものがあり、音を抵抗なく習得する能力が備わっている。

(4) 「聞く」「話す」中心のコミュニケーション活動

言語習得の自然な段階を考え、内容としては音声言語を中心に文字言語はそれを助ける手段として音声言語の助けとなる範囲で指導する。中学校での英語学習では、初期の段階で「聞く」「話す」の活動から徐々に「読む」「書く」活動も加わり、それとほぼ平行して生徒の能力差も現れ、興味・関心が薄れがちになることが、課題の一つになっている。中学校に向けての準備としての英語学習ではなく、外国語に触れ、慣れ親しみ、コミュニケーションを図ろうとする態度を育て、情意面での興味、関心、意欲づけを伸ばすことのできる活動とする。

(5) 学習の動機づけと子どもの注意集中域を考慮した活動

外国語を習得していく上で、どんなに開始年齢を早め

たところで、子どもも指導者側にも苦勞が伴う。この苦勞を克服するためには、動機づけが必要である。

シカゴ大学附属小学校⁴⁾での第2外国語としてのフランス語学習における研究結果の一つに「極端にフランス語の成績が良いのは、生まれながらのmental ability (知的能力)よりもmotivation (動機づけ, 興味・関心)の因子の方が重要である。」と記している。

小学校、特に低、中学年の子どもの年齢では、注意域が短い事も特徴的である。そのため教室での授業中ひとつの活動から他の活動へと短い時間での活動を用意し、変化を持たせることで、動機づけを高め、注意を持続できることになるのではないかと考えた。子どもは活発に動くので、チャンツ, action games (アクションゲーム), picture bingo (ビンゴ), role play (ロールプレイ)などの活動を工夫した。

6. 研究の方法

本研究会は川崎市小学校国際教育研究会のメンバーの先生方の経験と中学校英語科のメンバーの先生方のアイデアとを融合させ、ネイティブ・スピーカー (ALT)との交流, 体験を通してのチーム・ティーチングの授業形態で直接英語に触れながら「コミュニケーションに対する意欲」, 「英語での基礎的な表現力」, 「ネイティブイングリッシュへのリスニング能力」, 「国際理解」の育成を目指し, 言語・文化に慣れ親しむ機会をもたせることが適当と考えた。

①先行研究, 参考文献などからの情報収集をする。

②ALTとの交流の機会は多くても年10回程度と考えられる。少ない機会ながらも計画的に行えるよう活動内容を精選し, 具体的な活動例と授業実践を通じたいくつかの指導案を作成する。

③中学校での英語授業で実際に扱っているコミュニケーション活動のアイデアを小学校段階で指導しやすい形にして活動例を作成する。

④子どもが日常の日本語使用の中で気づかず使っている外来語を活動の中に取り入れていく。

⑤体験的学習の初期の段階と学習が進んだ段階とで児童の外国語学習の意識がどう変化したかをアンケートで調査する。

⑥体験的活動を中心におき, グループワークでの授業展開を試みる。言語材料は活動によって精選する。

⑦授業実践を行う中で1から6までについて検証し, さらに有効な授業の進め方を協議・検討する。

II 研究の内容

1. ゲーム的な活動

ゲーム的な要素を取り入れることで, 楽しい雰囲気づくりができる。ゲームの効用について, Kurashen 及び Terrellは「ゲームは, インプットを与える為に使えるので, 習得活動として適している。学習者は普通, ゲームの結果に興味を持ち, ゲームをするために使われる言語形式にではなく, ゲームそれ自体に注意を集中する。」と定義している。活動がゲーム形式で与えられれば, 子ども達は夢中になり, 素早く活動する。ゲームは初期の段階では欠かせないものである。

また, 活動の中では一人一人の発話の機会が多くなるような配慮をする。

2. ALTとの個人的, 直接的, 体験的コミュニケーション

ALTとの個人的・直接的・体験的なコミュニケーションや関わりをもたせるように配慮した。例えば, ALTとクラス全員との挨拶だけでなく, ALTと一対一で握手をしながら挨拶を交わすなど体験させることで学ぶことの印象を強くさせたいと考えた。

3. チャンツ

授業の雰囲気作りと英語のリズム感を育てるために授業の最初にいくつかのチャンツを試みた。リズムカルに身体を動かしながらの活動は, 特にこの時期の子供は苦にならず, むしろ楽しく活動できる。また, 毎回授業にチャンツを用いることで授業の雰囲気作りや口慣らしをあまり苦しめずに行うことができる。

4. 段階的あいさつ

あいさつはコミュニケーションをスムーズにさせる上で大切である。一言ずつの簡単な挨拶から段階を追って教師側が, 表現を意識的に増やしていきながら, 慣れさせていくことにより, 外国人と言葉を通して関わる楽しさを知るきっかけとする。

⁴⁾『早期英語教育』福田直巳 大修館 1993年 p.46

T: Hello. Nice to meet you.
S: Hello.

↓

T: Hello. Nice to meet you.
S: Nice to meet you.
T: How are you today?
S: I'm fine, thank you.

↓

T: Hello. Nice to meet you.
S: Nice to meet you, too.
T: How are you today?
S: I'm fine, thank you? And you?
T: I'm fine, too. Thank you.
I like apples. What fruit do you like?
S: I like watermelon.

5. 年間を通して行った活動内容

子どもが英語を楽しめる活動を中心に考え、各々の活動は順序立ては考えずに行った。

- (1) あいさつ
- (2) 自己紹介
- (3) 数
- (4) 年齢
- (5) 電話番号
- (6) 好きなもの
- (7) いろいろな語彙をあてはめて「・・・バスケット」
- (8) ビンゴゲーム
- (9) 場所や道を尋ねる
- (10) 家族について

その他課題解決的な特別プログラムで1時間使った展開例も扱った。

展開例 1

[お大事に Take Care of Yourself]

目標 実際の生活場面で必要な体調不良または身体的苦痛の表現の仕方を学習する。“I have a headache.” “I have a stomachache.” “I have a cut.”などの表現を実際に使い、ALTや級友と対話するなかで適切な処置をしてもらう課題を達成する。

事前に行う準備

- ① 3つに仕切った、それぞれ「頭が痛い(headache)」「お腹が痛い(stomachache)」「切り傷(cut)」の見出しをつけた薬棚を教室の4カ所に設置(1つをALT用、残り3つは生徒用)
- ② 頭痛薬、胃薬、傷薬の絵(子ども、ALTが作成)を4カ所に人数分配置する。
- ③ 「～子どもクリニック」「ALTクリニック」の看板を設置する。

展開(40分)

① JTとALTのデモンストラーションスキット

JT: Hello. How are you today?
ALT: I'm not fine.
JT: What happened?
ALT: I have a cut.
JT: Here you are. This is Band-Aid.
Take care.
ALT: Thank you.
JT: You're welcome.

② 練習

- ・ JTが動作をし、ALTがJTの状態について質問する。子どもが、それについて答える。
- ・ ALTがジャスチャーした動作を子どもが英語で答える。
- ・ ALTの後について動作をしながら繰り返し発音練習する。

③ クリニックゲーム

- ・ JTとALTが医者役になり、子どもが患者として2カ所のクリニックを訪ねる。

活動の目標となる対話

JT/ALT: Hello. How are you?
S: I'm not fine.
JT/ALT: What happened to you?
S: I have a headache/stomachache/cut.
JT/ALT: Oh, I see. Here you are. Take care.
S: Thank you.

- ・ 生徒どおしで医者、患者役になりそれぞれ演じる。JT/ALTは、患者になり、子どもの援助をする。

④ まとめ

- ・ ボランティアの子どもとALTで再度演じる。

展開例 2

[ハンバーガーショップゲーム]

ハンバーガー店での店員の応対とお客の注文の仕方を実際の品を使って課題解決的に活動を行う。最初にALTが店員となり次に子ども達にも双方の役を与え活動する。

第3学年「英語学習」活動案 1月

授業者 JT, ALT

【日 時】 平成11年1月14日(木) 5校時 1:35~2:20

【題 材 名】 ハンバーガーショップへ行こう!

【題材目標】 リズムよくチャンツができる。

ハンバーガーの注文のしかたを知り、実際に買い物ごっこをする。

	学 習 内 容 と 活 動	担 任 と ALT の 支 援																																						
出 会 い と リ ラ ッ ク ス の 場	1 ウオーミング・アップ ・チャンツ “One Apple, Two Apples.” 2 ジャック先生とあいさつ ・Hello. ・Good morning. ・Good afternoon. ・How are you? 3 メニュー・オーダー・ビンゴ <table border="1" style="margin: 5px auto; border-collapse: collapse;"> <tr> <td></td> <td></td> <td colspan="5" style="text-align: center;">数字を入れる</td> </tr> <tr> <td rowspan="5" style="text-align: center;">メ ニ ュ ー</td> <td style="text-align: center;">チーズバーガー</td> <td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">フライド・ポテト</td> <td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">ハンバーガー</td> <td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">オレンジ・ジュース</td> <td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">アップル・パイ</td> <td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> </tr> </table> ※斜体字の部分は子どもたちが記入			数字を入れる					メ ニ ュ ー	チーズバーガー						フライド・ポテト						ハンバーガー						オレンジ・ジュース						アップル・パイ						※リズムよいチャントで。 ※One, Two, Threeをはっきりと。 ※できるだけ多くの子どもと直接あいさつ を交わすようにする。 ※親近感を持たせたい。 Ex. “Two hamburgers, please.” “Three orange juice, please.” ※pleaseをつけるように助言する。 ※ALTが言うやり方と、子どもが言うやり方 がある。
		数字を入れる																																						
メ ニ ュ ー	チーズバーガー																																							
	フライド・ポテト																																							
	ハンバーガー																																							
	オレンジ・ジュース																																							
	アップル・パイ																																							
コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン の 場	4 ハンバーガー・ショップ・プレイ 基本スキット <table border="1" style="margin: 5px auto; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding: 2px;">店員: May I help you?</td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px;">客: Yes. <u>Two hamburgers and one</u> <u>coke, please.</u></td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px;">店員: OK. Here you are.</td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px;">客: Thank you.</td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px;">店員: You are welcome.</td> </tr> </table> ①担任とALTの手本を見る。 ②ALTとの反復練習。 ③買い物ごっこをする。	店員: May I help you?	客: Yes. <u>Two hamburgers and one</u> <u>coke, please.</u>	店員: OK. Here you are.	客: Thank you.	店員: You are welcome.	①担任とALTでやってみせる。 ②一斉授業の形態で、ALTと子どもたちで反復 練習をして、飯高に慣れるようにする。 ③実際にハンバーガー・ショップ・プレイを する。 ※下線部分は子どもたちが考える。 ※ALTが店員、子どもが客。 子どもにも店員をやらせてみる。 ※終わった子は、次回の買い物ごっこで使う ためのお札に色をぬる。																																	
店員: May I help you?																																								
客: Yes. <u>Two hamburgers and one</u> <u>coke, please.</u>																																								
店員: OK. Here you are.																																								
客: Thank you.																																								
店員: You are welcome.																																								
	5 別れのあいさつ ・Good-bye. See you again.																																							

Ⅲ 研究の成果と今後の課題

1. 研究の成果

(1) 生徒のアンケートから

授業実践を行った川崎市立小倉小学校3年生を対象に
 研究を始めた98年4月と99年1月に同じ内容でアン
 ケートを実施した結果である。

あなたは、学校外で	習っている	習っていない	
英語を習っていますか	20.3%	79.7%	(98年4月)
	↓	↓	
	21.1%	78.1%	(99年1月)
これから学校で英語	思	思わない	わからない
を習いたいですか	45.3%	22.3%	32.4%
	↓	↓	↓
	68.3%	9.1%	21.8%

外国に行ってみたく すか	すごく行って みたい	少し行って みたい	あまり行き たくない	わからない
	48.0%	29.7%	13.5%	8.8%
	↓	↓	↓	↓
	48.6%	34.5%	9.1%	7.0%
外国人と会って あいさつすること	ぜったい できる	たぶん できる	たぶん できない	ぜったい できない
	38.5%	47.3%	10.8%	3.4%
	↓	↓	↓	↓
	30.9%	51.4%	12.6%	4.9%
外国人とあく手 すること	45.9%	42.9%	9.5%	2.0%
	↓	↓	↓	↓
	50.0%	40.1%	7.0%	2.8%

体験的学習を何回か繰り返す過程で子どもの興味・関心・意欲は、徐々に高まってきていることが分かる。

また、英語を通してのコミュニケーションに慎重な態度になってきているのも分かる。実際の授業を参観して、聞き取る力は、向上しており、ALTの問いかけには間を空けずによく答える事ができるようになってきていることが、観察できた。

また、今年度川崎市立M中学校1年生に英語についてアンケートをとった。これらの生徒の一部は、昨年度小学校6年生時、ALTとの英語学習を体験した生徒が含まれており、他の小学校出身生徒と比較してみた結果である。

上段は6年時英語学習を体験した生徒
下段は他の小学校出身生徒

	とても好き	が好き	普通	少し嫌い	嫌い	不明
友達と議論や 話し合いをする	12%	24%	52%	12%	0%	
英語の勉強を する	28%	24%	28%	20%	0%	
	5%	28%	37%	26%	4%	
外国の音楽を 聴く	28%	28%	28%	16%	0%	
	12%	27%	40%	13%	7%	1%

アンケートは、M中学校1年生対象に、中学校入学後約6ヶ月経過した10月中旬に実施した。既に中学校での英語学習は「読み」「書き」の活動もかなりはいつてきているにもかかわらず、小学校で学習した生徒達と他

の小学校出身の生徒達を比較した時、前者の方が英語や外国のことに対する興味、関心が依然より高いことが分かる。

さらにあることが表現できなければジェスチャーを使ったり、分からない言葉があっても類推しようとするなどストラテジーの面での違いが大きいと言える。これは小学校での英語学習の成果に期待を持たせてくれるものではないだろうか。

こうした子どもの情意面を刺激することで異文化を理解しようとする態度が現れ、また、国際理解の道具としての英語学習に対する興味・関心・態度も延ばすことができたのではないか。

(2) 模倣する天才

授業実践の中でALTが発音した日本語にない発音体系の単語や表現をほとんどの子ども達が、ほぼ同じ発音で繰り返し発音できることが観察できた。中学生時期には矯正しにくい英語の発音体系を小学生の時期では、教師の説明を加えることなく模倣することができる。

授業後の子どものALTへの手紙の中で以下のように書いている。

わたしはジャック先生とあそんでたのしかったです。
またきてほしいです。
いろいろな先生がきてびっくりしました。
またきてほしいです。
ジャック先生に、しつもんをゆうのを、わすれていました。
ワット カインド オブ フルーツ ドゥ ユー ライク
といたかった。

中学生がカタカナ標記する時は、各単語を独立させて認識し、標記するが、ここでは聞こえたままをセンズグループ(意味の固まり)で捉え、カタカナ標記しているのが分かる。

また、別の子どもは

10月21日は、センキュー

サンキューと書かずに、thの音をカタカナ標記している。

ただし、すでに外来語として認識している語については、カタカナ発音になっていることも観察できた。外来語を使った導入や活動では、子どもの理解度は高いが、日本語の発音になり、ALTに理解できない場面も見うけられた。

2. 今後の課題

1年間の限られた期間の中で、小学校段階でどのような学習が可能であり、有効であるか。また、子供たちの実態、反応がどうであったかなど、具体的に分析するまでには至っていない。

また、具体的な外国語教育導入にあたって、何が必要なのか、学校はどんな条件整備をしていけば良いかを整理していく必要がある。

(1) 2002年からの新しい教育課程で「総合的な学習の時間」で外国人とのチーム・ティーチングで英語を通じての国際理解教育を実施した場合、日常的におこなうことは、人的に現在の状況では不可能である。そこでネイティブ・スピーカーを含まない活動例をつくり、さらに、それらいくつかを教材化していく事が大事かと思われる。

(2) 年間を通してのチーム・ティーチングによる授業をプログラム化し、より多くの小学校で体験的学習が可能になるようなガイドラインをつくっていく必要がある。

(3) 学習活動の中に英語を中心とした活動と国際教育を中心とした活動と領域を設定し、それぞれの目標を明らかにしていかなければならない。

(4) 英語と学ぶ環境を作る

学習の雰囲気さをさらに高める上で、教室環境作りが考えられる。英語を使う場面をできるだけ本物志向にするためである。空き教室を英語学習用のクラスにして、学びの雰囲気作りをする。壁面には、世界地図、国旗やポスターなどを貼るなどを試みる。

おわりに

本研究の検証授業の中で、子ども達が何のためらいもなくALTと授業を行なっている姿を参観しながら、ある一定の英語力を子ども達に身につけることができれば、さらに国際理解が深まり、ただ楽しかったで終わることにならない交流活動ができると考える。

最後に、本研究会を進めるにあたりご多忙にもかかわらず、御指導をいただきました相模原市教育研究所の魅澤和雄先生はじめ、川崎市国際研究会の先生方ならびに各研修員の所属校長先生、教職員の皆様、ALTに心より感謝申し上げます。

[参考文献]

- 垣田直巳 『早期英語教育』 大修館書店 1993年
五島忠久 『子どもが英語と出あうとき』 杏文堂 1993年
垣田直巳 『英語教育学ハンドブック』 大修館 1979年
垣田直巳 『早期英語教育』 大修館 1993年
神奈川県相模原市教育研究所研究集録第156集
「小学生における英語学習に関する研究」 1997年
神奈川県相模原市立相模台小学校
第1回公開授業参観資料 1998年
福岡県教育センター研究紀要No.116
「小学校への英語教育導入に関する考察」 1997年
石川県金沢市教育委員会
「英語活動の指針I」～この秋からの試行にむけて～ 1997年
三重県鈴鹿市立椿小学校実践報告会資料 1998年
学習情報研究7月号
学習ソフトウェア情報研究センター 1998年
小学校における外国語学習指導案集
姫路市教育委員会 1998年
英語教育9月増刊号 大修館 1998年
小西友七『アクティブ ジーニアス 英和辞典』 1999年

[指導助言者]

相模原市教育研究所 研究員 魅澤 和雄
川崎市立下平間小学校 校長 柴田 洋吾